

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルタケ谷九〇四 電話(03)3337714649 FAX(03)329915367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 宛金 中央労働金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言
国鉄闘争の終結にあたって
階級闘争はつづく

山下俊幸……2

資本主義的合理化と議論

滝野 忠……3

―「反合理化」での合宿・勉強会―

自然と人間……

―原発爆発からあらためて考える(上)―……5

内部被曝を無視する安全基準は信用できない!

……7

―政府・東電の宣伝に抗し市民科学者国際会議―

民主はやっぱり保守党だった……

―二大政党制づくりと学者・文化人―……10

若者の失業率はなぜ高い……

……11

―向坂先生の緒論稿を読み直そう―

読者からのおたより……

……13

旬刊 社会通信

NO. 1107

二〇一一年二月一日号

二〇一一年二月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

国鉄闘争の終結にあたって

階級闘争はつづく

先輩、友人の皆さん、国鉄闘争は二四年の激闘を終えました。

八月二六日をもって、国労闘争団全国連絡会議及び「連帯する会」「中央支援共闘」は解散し、私の国鉄闘争における全ての任務を終えました。今日までのご指導、ご協力に心から感謝申し上げます。四四歳から二四年間、国鉄闘争に没頭してきましたが、残された人生はこの経験の糧として静かな日々を送りたいと思っています。

闘いが二四年という長期になったこと、闘争団の原職復帰がかなわなかったことなど反省すべきことが多々あり心残りではありますが、闘争団の皆さんの決断と、全国で支援運動を担われた皆さんに心から敬意を表します。

六月三〇日、闘争団は全国代表者会議を開催し、議論の末、闘争の終結を決定しました。結論が出た後、会議室にねぎらいの挨拶に向きました。私の挨拶の後、出席者の提案で「国労組合歌」の合唱が始まりました。私も何十回、何百回と聴き、口ずさむことができました。「国労組合員」ではなくなる彼らの合唱が始まったとき、彼らの心情を鑑み涙が止まらず、平静をよそおって会場を後にしました。

省みますと、国鉄闘争は労働運動史上、空前の大闘争でした。二四年間、闘争団・家族の身近に位置し、親しく接してきた私の脳裏には、彼らの苦渋の心情がよぎり、様々な思いが込み上げてきます。

二四年間、国鉄闘争支援を訴え全国を駆け回り、その中で多くの人々に出会いお世話になりました。皆さんとの出会いは、私自身の大きな財産であります。国鉄闘争の経験は私自身の人生そのものであり、その中のできごとは私の履歴書そのものです。

闘争団の皆さんは、決して悪いことをした訳ではありません。只ひとつ、国労脱退強要が進むなか、仲間を裏切ることなく国労に留まった善良な人たちです。本当に心優しい人たちでした。このような人たちと二四年間、苦しみ、喜び、そして行動を共にできたことは、私の誇りでもあります。

闘争団の解散会や慰労会、支援共闘の解散総会や報告会など、地方に招かれる機会が多く、私自身も二四年の想いを改めて整理をしているところでもあります。

国鉄闘争が終結しても、社会が良くなるわけではありません。現状は新自由主義が猛威をふるい、労働運動の停滞、後退、弱体化もあいまって悪化の一途であります。資本主義社会が続く限り階級対立はなくなりませんし、むしろ激化します。したがって、階級闘争はつづくことになります。

国鉄闘争の総括運動を通じて、成果と教訓を明確にし、国鉄闘争後の労働運動、次世代の労働運動の指針のようなものが出来ればと期待しております。

同時に、闘争団当事者、国労組合員はもとより、この闘争に関わった全ての人々は、資本・権力の差別と攻撃、そして闘争団の奮闘を後世に語り継ぐ義務と責任があると思います。国労の前進と闘争団の皆さんの新たな活躍を願いつつご挨拶とします。

(二〇一一年九月、山下俊幸)

資本主義的合理化と議論

―「反合理化」での合宿勉強会―

「反合理化」と社会主義

十月はじめ、国労の伝統的勉強会である「国労〇〇反合理化研究会」の仲間九名の「反合研合宿」に入れてもらいました。伝統的と言いましたが、今ではこの名称をもつのはこの研究会だけ。場所は宮城県と山形県の県境・鳴子温泉郷です。

「反合研」は向坂先生・灰原茂雄さんの肝入りで、国労反マル生闘争(一九七一年)時、国労の若い仲間で行われました。なぜ反合理化研究会だったのか。いま思えば、社会主義運動の実践には国民的政治運動を率いる社会主義政党とともに基幹産業の労働組合が新しい社会づくりの中心に座ることが絶対的必要。そのためには企業主義に負けない思想、企業主義に負けない実践力をつくることがめざされたのです。毎月一回、東京・西ヶ原寮で勉強会。今は取り壊されてしまいました。木造三階建てのオンボロ。歩けばキシミ、三〇人、四〇人集まった時には「床ぬけるんじゃない」、「火事になれば全員アウト」といいながらニコニコしていたのだから、みんな若かった。もっとも熱心だったのが向坂先生と灰原さん。七〇歳を超えた向坂先生は午前一時、二時まで同席されました。灰原さんはわれわれと雑魚寝(ざこね)でした。国労の中心メンバーは宮坂要(甲府支部長)、渡辺和彦(横浜支部長)氏ら、事務局で奮闘していたのが早田昌二郎氏。組合役職、組合員歴問わず国労強化への思いを述べあっていました。向坂先生は若者の論議をニコニコしながら聞いていた。

国労反合研は国労に革命を起こしました。名古屋大会(一九七二年)で松里福慈氏が「国労綱領は時代にあっていない。もっと階級的な綱領を」と発言。それから三年後の水戸大会で「社会主義社会をめざす」とした今の綱領がつくられた。

「反合研」運動は全電通、全逓、自治労、私鉄、全専売、日教組等の単産、職場・地域へとまさに燎原の野を行く野火のように広がった。今、「反合研」学習会をやっているのは私鉄の仲間たち。

「反合研」合宿は、資本主義的合理化反対で労働組合を強化する必要性を鋭く指摘。勉強会、合宿って、本当に楽しい。

勉強漬け

「〇〇反合研」、薬漬けならぬ勉強漬け。朝十時、新幹線で十二時古川着。レンタカーで一路宿へ。昼飯にソバを食って、道の駅で間食は当然のことです。三時、宿に着くや合宿勉強会。「それぞれに運動への思い、現状を述べよ」、みんな報告文つくってました。手ぶらで行ったのはぼくぐらい。JRにかぎらずどの職場も能力主義管理、賃金・処遇制度「改革」でたいへん。こんな問題に「どうとり組むか」が最大のテーマでした。五時半まで続きました。すごいでしょう。

温泉はよかった。宿のおやじさん、「おれんちよりいい湯はない。こっちがお勧め」と、うす暗い地下の浴室へ。これまで経験ない臭いと湯、硫化硫黄(りゅうかいおう)

が主成分。暑いより熱いの風呂場で源泉は百度超とか。ぼくは熱い湯、苦手。同湯した仲間に「水入れて」、でも風呂はサウナ状態。こんなのはじめてです。私の入浴はカラスの行水。「お先に失礼」と言ったと同時に、宿のおやじさん「これからスペシャル・バージョンよ」と換気口を手にした板で閉鎖。「天然サウナよ」。みんな「初体験」と温泉サウナ喜んでおりました。

夕食は六時半から八時半。うまかった。特に御飯が。あとはどこでも同じ。部屋での酒盛り。小生は活発な議論を横目にサヨナラ。午前一〜二時まで続いたみたい。

翌日も八時半から勉強。テキストは灰原さんが八二年に講演した『三池闘争と労大・職業病闘争』。このテキストで灰原さんがいい良かったことをチューターが傍線**強調**。

①草の根はなんて言っても労働者が本当の草の根だ。

②労働運動の柱は、勝手に組合員の首を切らせないこと。

③会社側の保安サボによる公傷が、こともあるうに会社側の首切りになった。

④敗北の闘争を真剣に総括し反省して組織づくりを実行して「次のたたかい」を大衆闘争方式で全力でたたかう場合には一定の成果を上げることができる。

⑤労災・職業病は許せない、と反資本主義を基本とするなら、本気になつて運動全体をどうするか考えなければならぬ。

⑥今、運動は高揚期とはいえない。だけど、こう言う時にいろいろ準備しなければならぬ。

勉強、勉強、また勉強

ある仲間は「反合研」の意義を「本を読んで勉強しよう！」と、次のように総括してくれました。

「力と自信をつけるには、本を読むことが一番です。私は、灰原茂雄さんの『闘い学ぶ仲間たち』を読み返して、大きく勇気を与えられました。何より、運動への姿勢を学んだ気がします。

組合活動家が今、どうしても勉強しなければならないと私が思っているのは、①労働法、②資本主義の仕組み、③日本の労働運動史とりわけ国労運動の歴史だと思えます。このうち、①では、入門的なものとして、弘文堂の森戸英幸著「プレップ労働法」（一九〇〇円）、岩波新書水町勇一郎著「労働法入門」（二〇一一年）がいいかと思えます。もつとも法律の世界は難しいのですが、関心を持つだけでも違ふと思えます。②は、反合研の学習会でOKです。③は、適宜コピーを作つて。

一日通勤電車の中で三〇分読めば、一年では、一〇〇時間以上にもなり、二〇冊近く読めます。これは相当な力になりますので、お互いに勉強していきましょう。」と。

資本は「合理化」で儲け、われわれをいじめる。われわれはあの国鉄分割民営化、今の新人事労務政策、エルダー・契約社員、平成・社会人採用含めみな「合理化」。「合理化」への関心、たたかいたいなしには社会変革への力はできないと語つておりました。

（滝野 忠）

自然と人間

環境

―原発爆発からあらためて考える(上)―

原子力発電は財界・官界・政界・学界・過疎地を一体化し、自民の政治基盤を強め、核兵器づくりの土台としたいとの思惑で始まった。ビキニ環礁での米国核実験で“黒い雨”、第五福竜丸の久保さんが死に、広島・長崎で何十万の生命を奪われたというのである。

原発は日本は資源少国、したがって豊かさには原発が必要との宣伝ではじまった。

地球環境「破壊Ⅱ温暖化」の進行は、炭酸ガスが原因との風潮がつけられ、原発は炭酸ガスを出さないから環境にやさしい、原発の電力生産価格は水力、火力にくらべ格段に安いと、狭い日本に五四もの原発がつけられた。そして今では、「原発なくしては生活はなりたたない、経済発展には発展途上国への原発輸出が不可欠、原発なくして地域の雇用は」との脅迫である。

温暖化

地球温暖化の原因は炭酸ガスか。炭酸ガスが原因との確証はない。炭酸ガスは増え続ける。化石燃料消費は世界経済拡大とともにふえる、工場で自動車、冷暖房の排気ガスとして。森は人の営みと反対に炭酸ガスを代謝の原料とし酸素を出す。その森、熱帯雨林地域は南米アマゾン、アジア、アフリカで消えている。ロシアではシベリア寒帯針葉樹林(タイガ)が石油・ガス開発で、大昔の地中海性かん木林が切り倒され農耕地、ガレー船の原料にといったように緑は消え大地は砂漠化された。こうして炭酸ガスがふえていく。

温暖化は炭酸ガスだけか。さまざまな放射熱、温排水がある。建物は鉄筋コンクリートづくりで冷暖房装置なしには人間は生きられない。車はたとえ全部が電気自動車になろうと冷暖房装置なしには走れない。原発は炭酸ガスを出さないとしても七〇%の熱エネルギーを温排水として海に流す。こうして空気、海水は温められつづける。

これらの総合として地球温暖化、環境破壊が引き起こされる。文明発生時、環境破壊は局地的地域的だった。縄文、弥生の土器文明がいい例だ。土器をつくるにはまきが必要。居住地近辺の木材は切り払われる。それとともに人は住居を変える。環境が壊され住めなくなったためだ。当時は炭酸ガスなんて問題にもならない。地球規模ではぜんぜんない。炭酸ガス排出が地球規模になったのは一九世紀の産業革命以降、とりわけ石炭・石油化学発展と自動車文明が始まった二十世紀のことである。

反原発に身を投じた高木仁三郎氏は著書『反原発、出前します―原発・事故・影響・そして未来を考える』(七つ森書館)で、エネルギー大爆発をこう書いている。

「人類が地球に生まれ、エネルギーを利用しながら大量の化石燃料消費時代まで歩んできました。人類が今まで使ってきたエネルギーをみてみると、数百万年前からその消費エネルギーは少なく、そしてほとんど変化していなかったことがわかります。何億年もの時間をかけて太陽エネルギーが蓄積されてきた貴重なエネルギー資源を、

自然と一体になって自然に還元しながら使って生きてきたのです。産業革命がきっかけとなってエネルギー消費は伸び始めますが、その影響は、まだヨーロッパの一部にしかみられず、たいしたことはありませんでした。しかし、二〇世紀に入ると、世界的に急にエネルギー消費が伸び始めます。石炭が大量に使われ始めたことと、電気が実用化されたためです。数百万年以上かかって少しずつ使ってきた貴重な資源を、わずか一〇〇年たらずの間に一気に使ってしまったのです。特に、一九四五年の戦争終了後、消費は急に伸び始め、日本は六〇年からの高度成長時代に世界の動向からの約一〇年の遅れを一気に取り戻します。

二〇世紀が（世界のエネルギー消費と資源供給の推移で）人類の歴史にとっていかに特異な世紀であったか。そのために、地球の環境破壊という取り返しのつかない結果を招いてしまったのです。一九七〇年から一九九〇年までに二億平方キロメートルの森林が喪失し、中国の作付面積よりも広い一億二〇〇〇万平方キロメートルの土地が砂漠になり、またインドの全耕地表土に相当する農地の表土四八〇〇億トンが失われました。また数千種の動植物が絶滅し、人口も一六億増加し、化石燃料を燃やして大気中に放出される炭素の量は年に六〇億トンにもなりました。

現代は明らかに石油と石炭の時代で、原子力などは一次エネルギー全体からみればごくわずかであり、石油と石炭の大量消費そのものを何とかしなげり、原子力などではとてもそれらの問題を解決できないのです。後で述べますが、深刻化している地球温暖化も原子力ではどうにもならないことなのです。この状態を肯定して放っておくと、エネルギー消費は伸び続け、人類に未来があるとはとても考えられません。」（二二七〜二二九頁）

放射能

原発はもつと深刻だ。ウラン鉱山から原発燃料まで多大な加工が必要。その中で炭酸ガスが放出される。ウラン燃料は燃やされる中、現在の科学技術では処理不能な放射能を生む。さらに燃えカスを処理できる技術はない。炭酸ガスを出す出さないの問題ではない。それは福島原発爆発で福島だけでなく、全国民が「考えさせられ」ていることに明らかだ。

東北を旅した時、スーパーを探検した。秋はキノコの季節。この時期、街道沿いに出店が林立し、キノコが売られる。帰る日を見つくり、どんなキノコを買って帰るか、地方の名産品が東京のデパートで売られるようになってからの最大の楽しみ。路沿いに出店はいっさいない。友人の山田氏―元国労・山形在住―いわく、「今年は遅い」と。

道の駅にヒラタケがあった。養殖ものだ。値段は三百円。駅ビルのスーパーでのこと。買ったヒラタケの量が倍以上あるものが同じ三百円。別の売り場に半分にも満たない同じキノコが三百円。「なんで」と産地を見れば、私が買ったのは宮城産、倍以上の量のあるのは福島産。小さなキノコ、それも天然じゃなく養殖でこんな被害を受けている。

「風評」なんて間違いい。放射能は恐ろしい。見えない、臭わない、したがってどこ

に沈殿しているかわからない。東京にいたってそうだ。無頓着なわたしだって、「その野菜、果物はどこの産」って気になりますもの。東京、これら出荷が多いのは福島。次いで茨城。この二県以外の産地を確認し、買っているのが東京市民。「政府・東電は原発爆発にかかったいっさいの被害を全部補償すべき」が国民の声である。

こんな思いから、自然と人間についてあらためて考えてみた。(つづく)

内部被曝を無視する安全基準は信用できない！

—政府・東電の宣伝に抗し市民科学者国際会議—

二つの専門家会議

福島県で九月十一〜十二日、「放射線と健康リスク―世界の英知を結集し福島を考える」と題する国際専門家会議が開催された。主催者日本財団（会長 笹川陽平）、共催は笹川記念保健協力財団、福島県医師会、福島県立医科大学、および放射線医学総合研究所と聞き、その内容が気になっていた。

インターネットで調べてみると、この会議は「一〇〇ミリ以下は安全」「放射線は、ここにこ笑っている人には来ない。くよくよしている人に来る」などの発言で苦言殺到、響蹙（ひんしゆく）もかった山下俊一氏（福島県放射線健康リスク管理アドバイザー）を中心に、UNSCLEAR（国連科学委員会）・ICRP（国際放射線防護委員会）・IAEA（国際原子力委員会）・WHO（世界保健機関）など海外からのゲストを交え、「最前線の研究者」を結集して開催され、「年間一〇〇ミリシーベルト以下は大丈夫！」とする山下発言にお墨付きを与えるもので、なおさら気になった。

これに対抗するかたちで、開かれる集会があるので参加した。主催はNPO法人「セイピースプロジェクト」と市民団体「CRMS市民放射能測定所」。放射線内部被曝を重視する医師や物理学者など四人が講演。それを受けて、今後どうするかを話しあうものであった。

チェルノブイリの研究結果

最初は、「見えない恐怖 放射線内部被曝」（二〇一一年六月、旬報社発行）の著者・岐阜環境医学研究所所長 松井英介医師の『低線量』内部被曝による健康障害」と題する講演。「今年四月初めベルリンで開かれたチェルノブイリ二五周年国際会議では、チェルノブイリ原発事故によって汚染されたベラルーシやウクライナなどで、がんと先天障害のほかI型糖尿病や白内障の患者が事故前に比べて増加している深刻な現状が報告された。チェルノブイリ事故を上回る東電福島原発事故による自然生態系破壊を経験した今、私たちはチェルノブイリの調査研究結果に学び、福島県など汚染地域で今後発症するであろう『低線量』放射線内部被曝による晩発障害から子どもいのちと健康を守るため、できる限りの努力をしなければならぬ」と前置し、福島県が全県民を対象に三十年以上実施するという県民健康調査は「最低でも五十年は必要だ」と主張。「今は除染の大合唱になっているが、除染さえすれば本当に住めるのか」と訴えた。

「政府や東京電力職員、大学教授らは、テレビで、『直ちに健康への影響はない』と繰り返し、厚労省は、『妊娠中の方、小さなお子さんをもつお母さんの、放射線へのご心配にお答えします。水と空気と食べ物の安心のために』とパンフを発行。『母乳も水道水も空気も食べ物も、心配せずに今までどおり与えてよい』と書いてある。原発事故がレベル7だと発表された後も、記述は変わっていない」と鋭く批判した。

「文科省は、去る四月一九日福島県下の幼・保育園、小中学校などで、屋外の放射線測定値が一時間三・八マイクロシーベルト以上になる場合、校庭での活動を一日一時間以内に制限するよう通知した。これはICRPの暫定基準値・年間二〇ミリシーベルトまでの目安をもとにしたものだ。これに対し『年間二〇ミリシーベルトはドイツの原発労働者の基準だ。それを日本政府は子ども基準値としたのはなぜなのか』と、直ちにドイツから鋭い批判があった。

この基準値をめぐって、国の内外から引き続き抗議の声が上がり、日本政府はこれら抗議の世論に圧されて、年間一ミリシーベルトを表明し、除染キャンペーンを展開したが、除染で一ミリシーベルト以下にする目処が立たないと見たのか、政府の放射線審議会基本部会は十月六日、福島事故の汚染状況下にある住民の年間被ばく線量上限を法定の一ミリシーベルトから一〜二〇ミリシーベルトに緩和する方針を決めた。

一ミリシーベルトでも安全だとは言い切れないのが被曝だ。さまざまな立場の人間が連携して独自に判断し、子どもたちを守っていかなくてはいけない」と呼びかけた。

ストロンチウム九〇やプルトニウム二三九

さらに、「この被曝線量限度がセシウム一三七だけに關するもので、ストロンチウム九〇やプルトニウム二三九などその他の核種による被曝を考慮していない点が大ききな問題。また、時を経て出てくる先天障害や白血病・がん・免疫異常・循環器疾患などの晩発障害には、ほとんど触れられていないことだ。

無防備な状態で作業をしていて足の皮膚に火傷を負い、放射線医学総合研究所に入院した作業員のことは報道されたが、このような急性障害がないわけではないが、今こうしている間にも、いのちを削りながら事故を起こした原発の現場で働いている何千人（何万人かも）もの方々が、高度に汚染された現場あるいは現場近くで働いているひとの健康状態に私たちはもっと想いを馳せるべきだと思う」とも。

「外部被曝がおもにガンマ線が外から（多くの場合短時間）身体を貫いたときの影響であるのに対して、内部被曝は、身体の中に沈着したさまざまな放射性物質（核種）から繰り返し長期間にわたって照射される、おもにアルファ線とベータ線による健康影響だ。アルファ線やベータ線を出す核種の小さな粒が沈着した部位のまわりの細胞にとって、それらの線量は決して低線量ではない。アルファ線による細胞レベルの生体影響（分子の切断↓DNA障害）はガンマ線に比べると、桁外れに大きい。ベータ線もガンマ線にくらべ非常に大きなDNA障害を与える」と熱っぽく語った。

無視されてきたガン以外の健康被害

二番目の講演は、『チェルノブイリ大惨事による健康影響の実相』と題し、医師の

崎山比早子氏。「チェルノブイリ事故では発生当初、当局ががん以外の疾患は事故とは無関係であり、特に神経系の疾患は『放射能恐怖症』によるヒステリーが原因だと宣伝していた」と紹介。チェルノブイリの研究結果から、消化器系疾患、内分泌系疾患、神経・感覚器系疾患、泌尿器系疾患、循環器系疾患、腫瘍、悪性腫瘍などについてひとつひとつ詳細に解説。特徴として同時に四種類から五種類の疾病にかかり、老化の促進が著しく、実際の年齢よりも一〇歳から一五歳老化していると指摘した。

崎山氏は、「低線量の長期被曝が体にどういふ影響を与えるのか、現在までほとんど解明されていない」「放射線のもたらした被害は、健康被害だけではない。農業、畜産業、漁業、水産業、林業等の一次産業に及ぼした被害も測り知れないし、家庭・社会生活も破壊している。この責任をとるべき人、機関が何の責任もとらず相変わらず政策決定の場に居座っている。私たちの社会はこれを許している。これは何にもまして大きな問題ではないか」とまとめた。「日本の五四基の原発すべてを廃炉にする。希望はそこから見えてくる」とも。

経験 放射線治療

放射性ヨード131の内部照射を受けた私にとって、講演は納得のいくものだった。フランスからの輸入薬・放射性ヨード131は、小さな錠剤だが一個ずつ大きな鉛缶に詰められ、鉛の隔離病棟に入院している私のもとに運ばれた。二人の医師が完全武装をして、鉛のプレイと越しに私の口の中にピンセットで三錠投与。これが私の胸の甲状腺腫瘍に取り込まれリング大に育った腫瘍を叩きつぶすというものだ。

治療期間は当時約二十日間。鉛の隔離病棟には、放射線探知機が取り付けられ、厳重な管理下におかれ、医師や看護婦、検査技師の方々とも鉛のプレート越しに面接し、家族との面会はもちろんできない。投与によって胃腸が働かなくなっていたためか、食べ物はそのまま排泄。口や鼻の粘膜からは出血、閉経、白血球の激減や原因不明の胸水、耳鳴りに悩まされた。六ヶ月ぐらいいは体がだるく自分が自分でない。天候などちよつとした変化にも影響されて胸痛や胸の圧迫感で動けなくなったりだ。

四年間に三回の内部照射をうけたが、その都度、腫瘍は小さくなったようであるが、未だ残っていると。「これ以上の照射は骨髄を壊す」と中断し今日に至っている。

治療を始めるにあたって、主治医の説明は「副作用は少ないが、白血病が発症するかも。しかし、治療を受けてから十五年間元気で活躍している人もいる」と。

主治医と家族の表情から、「余命三ヶ月？」と感じていた私にとって、「あと十五年生きられるかも」に大喜び。副作用や他の選択肢について調べようともしなかった。今ごろ後悔しても仕方がないが、これを機会に勉強し、理解を深めたい。(東京・T)

民主はやっぱり保守党だった

― 二大政党制づくりと学者・文化人 ―

日本政治を二大政党に誘導したのはだれか。財界、労働組合・連合、商業ジャーナリズム、そして彼らの犬の尾となった学者・文化人だ。それを背後で動かしたのが日

本生産性本部、社会経済国民会議といった政府の肝入りでつくられた国策研究会。彼らは一九九〇年代はじめの「政治危機」への方策とし民間政治臨調をつくり、まず日本新党に肩入れし、小選挙区制度導入を実現させた。これで「反独占・反自民」の諸政党が国会で多数議席を獲得する可能性がなくなった。二大政党制への条件が整備されたのである。

民間政治臨調は九〇年代後半、「新しい日本をつくる国民会議」（略称・二一世紀臨調）と改称。二大政党、とくに民主党を独占資本の利益を守る政党に誘導した。その手法は政党の政策評論、そしてマニフェスト政治である。財界、松下政経塾は、自民は「お友達」「同志」、新しく生まれ出た民主は結成経過からどんな性格の党になるかわからない。したがって、民主を保守党に引きづり込む手法がこの二つだった。

民間政治臨調、二一世紀臨調で積極的に活動したのが東大総長・政治学者の佐々木毅、北海道大学行政学者の山口二郎といった学者グループだった。山口は自分が旗を振りつづけた政界再編に、今や懐疑的で距離を置き始めたかのようなようだ。山口は「東京新聞」十月二四日付の「本音のコラム」に、『泥鰌（どじょう）の行方』と題し、こう書いている。

「低姿勢で始まった野田政権だが、そろそろ政策の方向を明確にできたようである。TPPへの参加に踏み切る姿勢を見せ、普天間飛行場移設問題では名護に新基地を建設するための手続きを始めようとしている。この流れで行けば、税・社会保障一体改革についても、やらずぶったくりの増税を国民に押しつけてくるのだろうか。」

一体政権交代とは、何のために起こしたのだろうか。自民党がやりたくてもできなかったことを代わりに実現するために、民主党は政権を取ったのか。それが本音ならば、さっさと自民党と合体して、翼賛体制でも作ればよい。その方がよほど正直だし、反対する方も性根を据えて戦えるというものである。それとも、アメリカや経済界という強者に媚を売る競争を自民党としたいのか。

言うまでもなく、政権交代とは、自民党・官僚連合体が決してやろうとしなかった政策課題を実現するために起こしたのである。寄付税制の改革や高校無償化など、民主党だからできたこともある。さらに、無駄遣いの排除と言うなら、原発関係の各種積立金、特別会計を仕分けの対象にして、兆円単位の金を捻出すべきである。

党内融和と政権維持を自己目的とする時、政治家の墮落は始まる。泥鰌がさらに泥の中に潜り込まないよう、折るばかりである。」

山口は二大政党の民主に「自民とは違う」政策、社会民主主義的政策を求めたようである。政界再編を主導した保守勢力は新たに生まれた政党にこんな道を期待したのは山口以外いなかったであろうから、山口は孤立し、「おれが求めた政界再編はこんなはずではなかった」と、「まじめ」な政治学者らしい「いらだち」をあらわにしてみせたのだ。学者つてしよせんこんなものとの見本である。

新宰相・野田の話を書く機会が三度ほどあった。彼には知性の一カケラも感ぜられない印象だ。野田は資本主義の矛盾がますます大きくなるなか、鳩山・菅の後始末、自民政治の負の遺産、さらには大地震・放射能からの復旧・復興という難事業が待ち受ける。国の借金、経済の分野では円高がますます高まるなかである。

こんな中日本生産性本部は二一世紀臨調の後継組織として日本創成会議を立ち上げた。この組織は野田が政府内につくった日本戦略会議の裏舞台組織に他ならない。民主党は政界再編から「通信」が訴え続けたように第二の自民党である。

若者の失業率はなぜ高い

—向坂先生の諸論稿を読み直そう—

若者の失業は平均の二倍

世界中で若者、労働者のストライキ、国民的大衆運動が燃え上がる。中東・北アフリカでは「反独裁」、EU・ユーロ圏では財政危機による緊縮財政批判、アメリカでは金融資本の中心街ウォール・ストリートへの抗議デモである。そして日本では脱原発をめざす大集会を中心に地域からの運動である。

この背景にあるのが①富の格差拡大、②貧困の拡大、③生活必需品（食料）・ガソリン）等の物価上昇、そしてなによりも④失業率の高まり、失業者の増大。

先進資本主義の失業率はスペイン二一・二%、ギリシャ一六・七%、フランス九・九%、アメリカ九・一%、イギリス八・〇%、ドイツ六%、日本四・三%、工業発展いちじるしい、BRICSの国ぐにブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカの実際の失業率はスペイン以上であろうし、中東、アフリカ、アジアの多くの国ぐに、中南米・カリブ海諸国では労働力人口の五〇%超が失業者といってもよい。

さらに深刻なのは二五歳未満の若者の失業率だ。スペイン四六・二%、ギリシャ四二・九%、フランス二三・五%、イタリア二七・六%、イギリス二〇・九%、アメリカ一七・七%。全体の失業率の約二倍にもなる。日本でも約二倍の八%である。ヨーロッパ、日本は少子化が大きな声で主張される。他方、中国を除く新興国、発展途上国は子どくさんで、三〇歳未満の青年たちが人口の半分を占める。

発展途上国には働き口がないから失業率は高くなる。先進資本主義では少子化がいわれているのに、若者の失業率が高い。経済学の常識である需要と供給の関係からすれば、若者と労働力が減っているから失業率は減ってあたりまえ。ところが若者失業率は上昇の一途。これは大きな矛盾だ。この矛盾は需要が供給以上に大きく減っていると考えれば、すぐに「解決」する。

政府や企業の経済分析者は若者失業が大きい理由に、①企業が望む労働力と若者が持つ労働力が合わない、②若者の就職への熱意と力が低下した、③若者の離職率の高さが企業の若者への評価を変化させ、若者を積極的に採用する姿勢を消極的にしているという。この分析は若者失業率が高い「真理」をついているか。

機械に食われる若者

うそである。若者へのいいがかりにすぎない。一九六〇年代まで中学卒業生が「金の卵」ともてはやされ、一九八〇年代までは高校卒業生が生産、金融、流通、商業の中心的担い手となった。生産力を急速に発展させた日本、ドイツは「完全雇用」が宣伝され、高い賃金にいやけをさし海外に企業を移転させたヨーロッパ諸国、アメリカは「失業国家」の色相を強めた。

科学技術の猛烈な発展は生産性を高め、一人あたり労働者が生む商品を飛躍的に高くした。それ以上に商品需要が拡大したから、「労働力不足」がいわれ、ドイツでは

移民が歓迎された。彼らは単純労働の職になった。雇用問題に大きな影響をもたらしたのはME・IT技術の革命的な発展である。工場は装置産業化、ロボット化でほぼ無人となった。大装置を作る労働者、管理・監視する労働者だけになり、保安・安全点検は下請けに委託される。金融・商業・流通過程では在庫・経営・集計といった複雑な労働過程はすべてコンピュータにとつて代わられた。若者を採用し、教育・訓練する必要が企業になくなった。企業は、したがって若者を機械の一部、「物件」として扱い、必要な時必要なだけ補充し、必要なくなれば廃棄するという資本主義的生産方式の本質が赤裸々に現れるようになった。まさにマルクスが『資本論』で解明した人口法則「相対的過剰人口」のあらわれである。

失業は資本主義の“病”

向坂逸郎先生は論文『資本主義における失業の不可避性』で、失業は資本主義社会の“絶対的法則”と、失業のカラクリを『資本論』の理論をわがものにし明らかにする。

「資本家的経営における生産技術の発展は、資本の有機的組成に変化を与え、これを高度化してゆく。即ち、不変資本（工場、機械、原料等々生産手段の形態をとる資本）に対する可変資本（賃銀の形態をとる資本）の割合を相対的に減少させる。このような可変資本の減少は、一般的には雇用労働者数の相対的な減少を意味し、賃銀低下、失業、したがってまた貧乏をつくり出す。即ち、相対的過剰人口をつくり出す原因となっている。無論このような可変資本の相対的減少は、必ずしも雇用労働者数の絶対的減少を意味するものではないが、しかし雇用労働者の絶対的増加には一定の限度が、資本主義的生産そのものによって与えられているのであって、これと共に大量の失業者を街頭にほり出す条件が与えられることになる。このことはいわゆる産業予備軍の成立であつて、それは現役軍の賃銀に対するおもりの役割をなし、労働者の賃銀を押し下げる作用をもたらす。このようにして資本主義社会には必然的に貧乏がなければならぬことになる。しかし、この貧乏は、マルサスの云うように自然必然的なものではない、資本主義の社会に特有な貧乏なのである。」（『マルクスと現代——科学的社会主義の根本問題』大和書房、一三六―三七頁）

「資本の『貨殖』のための競争は次第に資本の有機的組成を高度にするという事が出来る。したがってまたこのことは、資本価値の不変部分の可変部分に対する比率が大となる傾向となつて現われる。換言すれば、労働の生産力が大となるに従つて、即ち資本家がヨリ進歩せる技術を採用するに従つて、資本の不変部分に比較してその可変部分は減少する。労働力の購買に投ぜられる資本はこの可変資本部分である。資本の有機的組成の高度化と共に、可変資本が比較的減少するということは、労働力に対する需要の比較的なる減少を意味する。それは別の言葉でいえば、労働者の就職の機会が比較的減少することである。（同、一四三―四頁）

「社会的資本の量が増大し、この増大の程度も高くなるに従って、生産の規模も拡大されて就業労働者の数は増加する。かくて彼等の労働の生産力が発達し、生産される富の量が広大となるに従って、資本によって吸引される労働者人口が大となる。それにつれて、またヨリ大なる労働者人口が仕事からほうり出される規模も拡大されてくる。資本の有機的組成、従って又その技術的組成における変動もヨリ急速となり、この変動を同時的に或は交替的に受ける生産部門の数もますます大となって来る。即ち、『かくして労働人口は、それ自身によつて生産される資本の蓄積と共に、おのれ自身も相対的に過剰ならしめる手段を、ますます大量につくり出す。これが資本主義的生産様式に特有な人口法則なのである。』」（『資本論』、岩波文庫版 第三分冊、二〇八頁）（同）

このように資本主義的生産様式自身の発展過程は、必然的に『過剰人口』をつくりだしてゆく」（同、一五一―二頁）

失業はこのように中世・封建時代の疫病となった。さらに資本主義の貨殖欲、剰余価値追求は職場・社会の管理を強める。理由はさまざまだが一年に三万人以上が自死し、実行者は数倍を超える。さらに精神疾患である。これらは資本主義の根本矛盾による「社会的病」に他ならない。

◇ 読者からの おたより ◇

ごめん おそくなりました。今後ともよろしく、お願いいたします。

（山形・Y）

編集部より こちらこそ。今年はこの出来具合よろしくないよう。収穫祭いっですか。ぜひ参加したい。

残金カンパ 残金カンパです。熟年ユニオンで楽しく活動しています。

（神戸・M）

編集部より 感謝です。熟年ユニオンの熱心な読者、支持者の一人。

道内の電力 私たちのプロジェクトがいま問題としているのは、これまで道が発表してきた道内の電力需給シミュレーションは、元データは北電からのものであるため、道民に正しい情報が伝えられているとは言えないことです。北海道が持っている発電設備と発電容量、電源開発や自家発電している企業の総発電容量、個人の発電等道内の総発電容量、ピーク時となる十二月分の使用量、余剰電力量、さらに泊原発3号基全てが停止した場合どうなるのか、を道に宿題として預けています。全容が明らかにされ、実際に原発が停止しても道内の電気は大丈夫かが明らかに出来るようにしたい。ここをまず明らかにさせた上で、再生可能（自然）エネルギーに踏み込んで提案したい。

（北海道・I）

一・三憲法集会 「日米同盟」信奉で沖縄に基地を押しつけ、「安全神話」のウソで原発震災を引き起こした政府。棄民政策の上に居座りつづけるのか。基地の重圧と放射線被曝の中からあがる声を聴き、「平和のうちに生存する権利」（憲法前文）を考えます。お話は新崎盛暉沖縄大学名誉教授、音楽は「浪花の歌う巨人・パギヤん」こと趙博さん、場所は韓国YMCAスペースホール。開会一三時三〇分。有意義な集会、ご参加を！

三池大災害抗議集会 一九六三年の三川鉱での炭じん大爆発は四五八名の命を奪い、八三九名が一酸化炭素中毒患者に。患者・遺族の苦しみと、三井資本への責任追及の闘いは、四八年のときを経過しました。現地共闘は三池CO闘争が三池労組による「和解路線の変更」をうけ、和解に応じられない三二名とともに、塚元敦義さん・灰原茂雄さんをはじめとして一九八六年に結成され、以来、三池CO闘争に学び合い、ささえあう組織として運動を展開。昨年は七月に塚元正勝さんが亡くなったことをうけ、労働基準監督署に労災申請しましたが、①直接死因と一酸化炭素との因果関係を結びつけるのは無理、②加齢とともに全機能が低下、③COは『症状固定』であることを理由に労

災認定を否定されました。今年も抗議集会を取り組みます。

(三池CO現地共闘会議)

編集部より 一月一日(日)午後一時〜三時三〇分。場所 大牟田中央公民館

元気もらった六万人集会

原発にさようならする集会に五万人集まるといっているので、「こんな人数を見たい」「その一員になりたい」と参加しましたが、本当に良く集まっています。全労協など組合の旗がいっぱいでしたが、いろんな民主団体や不思議な格好でアピールする人たち、工夫をこらした看板、プラカードも目につきました。福島からの大勢の人々の参加にも「怒り」が伝わりました。入ったも連れや若い人が多かったです。福島からの大勢の人々の参加にも「怒り」が伝わりました。入ったも連れや若い女性や、東京の夫婦、女性の二人連れなども。脱原発のポスターも生かされた井上さん(灘区)の横幕も良かったのだと思います。脱原発の拡がりを感じることができ、元気をもらいました。

(兵庫・K)

編集部より 労組は表舞台には出ていませんでしたが、たいへんな数。とくに自治労の職場。

コミュニティユニオン全国交流集会 一〇月一日(土)〜二日(日)に熊本県で二三回コミュニティユニオン全国交流集会が開催された。全国から六二ユニオン、八〇団体三二〇名の参加がありました。あかし地域ユニオンから七名、明石地区労から一名が参加しました。

まず、定期総会議事、その後、「震災の防災補償―被曝の問題のこれから」と題して関西労働者安全センターの西野方庸さんによる記念講演。放射線の影響など詳しく説明。緊急時作業の被ばく限度引き上げを元に戻し、法令改正の真剣な検討。被ばく線量の管理に法律上の根拠を持たせ、すべての職業人の被曝管理を。原子力産業をはじめとした装置産業について労働安全衛生法三〇条の二を適用すべき。下請け構造と被曝管理(とりわけ緊急時)は両立せず、当面、職安法上の規制を強化すべきと求められました。特別報告として、東亜外禦分会から三人が登壇し、現状報告と支援のお願い。二日目は一分科会に分かれて交流しました。(あかしユニオン)

編集部より 有意義な集会だったよう。他からも報告いただいています。

他人事じゃない 福島県では幼稚園児から中学生に至るまで線量計を持たされ、被曝をさけるため校庭で思い切り身体を動かすこともできません。避難するかどうかを巡っての離婚、将来を悲観して相次ぐ自殺：報じられています。そして放射能いっばいの原発で収束にあたる下請け、孫請けの労働者。ここでも日本社会の格差、ひずみが現れています。しかし福島の災難は他人事ではありません。全国の原子炉の圧力容器脆弱性ワースト七のうち五つが茨木(大阪府)から一〇〇kmと離れていない美浜、大飯、高浜の原発で、しかも、想定津波最大波は全て高さ2m未満です。

(大阪市茨木市議 山下けいき)

参加 今年の新潟市職労秋葉支部の平和環境事業は九月一九日から二日間でした。明治公園での「さようなら原発集会」に参加して、神奈川県大和市に移動。夜は厚木爆同の皆さんと交流し、翌日は厚木基地問題を学習、現地視察してきました。厚木爆同の皆さんありがとう。(新潟・M)

編集部より 地方からの参加者多かった。「我が県からは百人」、「バス・新幹線で百人以上」と。

茨城県の東海村、福島のみなさんは目立っていた。

一〇〇〇万人署名がんばる 先日は原発関連の古い新聞切り抜きを、ご丁寧に返送いただき誠に有難うございました。三〇年前、この新聞は原発について、「高い危険を知りつつ、コンピュータまかせに不安を感じて、人間の監視作業も併せて管理しないと、複雑な原発の機械構造では安全運転は困難」なことを長々と解説していますが、「核の平和利用」に安全が無いことを、三月の東日本大震災で証明されました。

我が国は、広島、長崎で二度の被ばくを受け、さらにビキニ環礁、スリーマイル島、チェルノブイリ事故等々の核爆発の恐ろしさを世界的に確認されいながら、原子力発電に頼っている現状に、福島事故は起こるべくして起きているようなものですよ。

原発の安全について、野田総理はアメリカで国連会議の中で、「世界最高の安全性水準を高める」と豪語していましたが、誰が安全を証明するのでしょうか。

科学(化学)技術のことはわかりませんが、福島のように大自然の災害のように外部からの衝撃には勝てないことが証明されました。放射能が三〇K以上まで汚染が拡がり、たいへんなことになっています。『資本主義の飽くなき利潤追求』は止まることを知らない。本当に恐ろしい社会です。

「脱原発社会」にむけて一〇〇〇万人署名を成功させるよう頑張りましょう。

(北海道・S)

反原発署名 一千万署名に頑張っています。

(上越市・K)

編集部より 私もがんばります。